民報サロン

地域活性化の秘薬

藤森　弘

表題に意気込んで「秘薬」と書いてしまったが、地域の活性化に即効性のある特効薬はあり得ない―と、最初にお断りしておく。とりわけ、地域活性化の四要素といわれる「モノ、金、人、情報」を都会に吸収されてしまった農山村地域の活性化は容易ではない。再生への道のりは険しく、まだ多くの時間を必要とするだろう。

だが、時代は変わり、都会ではまねのできない豊かな可能性が農山村に芽生えつつあるのも事実だ。「天の時」は着実に近づいていると思う。そして、活性化の「地の利」は、農山村の側にこそあるといえよう。今、必要なのは、それを学び育てる「人の和」なのだ、と強調したい。

可能性の萌芽（ほうが）を見つける前に、地域の停滞を招き、非活性化させる元凶は何か―を考えることも大事なことだろう。現職の岐阜県知事である梶原拓さんは、著書「THE地域活性化大学」（実業之日本社）の中で、地域を非活性化させる病理として、次の四つを挙げている。私見も交えて若干説明しておこう。

第一に、思考停止症。どうしたら活性化できるかを考えようとしない、一種の無気力症で、重症になると脳軟化症に似てくる。このタイプは、子供や孫が都会に出てしまい、年をとって村のことは若い者まかせのお年寄りに多い。「わしらの代でこの家も終わり。どうせ無駄さ」とあきらめてしまう。これでは、せっかく良い人生で培った知恵を地域に生かしようがない。

第二に、マイナス思考症。世の中を暗く考える偏向症に陥るタイプ。何か良いアイデアが浮かんだ人がいても、それができない理由（法律の枠や資金不足）ばかりを考え、若者が考えた可能性の芽をつみとってしまう。役場の中年の管理職に多い。

第三に、行動停止症。舌の筋肉を除く全身の筋肉退化症で、「子供が生まれないのは○○だからだ」「若者が帰ってこないのは○○だからだ」と口は達者だが行動が伴わない評論家タイプの人。地域の危機を訴えるのは良いが、口にした言葉を具体的な行動に移さないと雰囲気を暗くするばかりで、希望の光は見えてこない。

第四に、マイナス行動症。他人の行動を妨害することに強い関心と快楽を感じる、いわば攻撃性の精神異常症。妬（ねた）みや偏見が先行して、村の活力を削いでしまう。派閥抗争やよそ者攻撃は、小さな村になればなるほど自殺行為に近くなる。自分とは異質な他者の良いところを見つけて、相乗効果で盛り上げていくプラス行動こそ活性化の道だろう。

「非活性化の病理」の説明が、やや長くなり過ぎたようだ。私の考える農山村地域活性化の秘薬とは何かを簡単にまとめておこう。

それは、これまでマイナスの価値とされてきた諸問題を逆手にとって、プラス価値に転じる「逆転の発想」である。例えば、奥会津地域は「過疎化、高齢化、豪雪の三重苦」というあまりありがたくないレッテルに苦しめられてきた。主産業の農業も自由化の波にさらされ、後継者不足が深刻になっている。

こうしたマイナスの状況を逆手にとるにはどうしたらよいだろうか。それは、そこに生きる人々のアイデアによるしかない。それを見つけるには、自分と違う考えの人を排除したり攻撃したりするのではなく、対話を続けることが何よりも大事だ。意見を交換する中から「新しい何か」を発見するしかない。最初に「人の和」こそが必要だと説いたのは、こうした理由からである。結論には程遠いが、地域活性化の秘薬の一つは「対話の持続である」とだけ最後に言っておきたい。

（昭和村喰丸・フリーライター）